

企業の社会的責任

佐藤 千壽



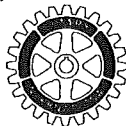


企業の社会的責任

パストガバナー

佐藤 千壽

東京東ロータリークラブ



国際ロータリー第2590地区  
職業奉仕委員会

装幀 著者

## 発行のことば

国際ロータリー第二五九〇地区  
パストガバナー（職業奉仕担当）

内海 榮一郎

私共ロータリアンは入会以来、諸先輩から職業奉仕こそロータリーの基盤であり、社会奉仕や国際奉仕その他の諸々の奉仕は職業奉仕を通じて必然的に行われるものと教えられて参りました。ロータリーは職業分類による一業一人を原則とする独特の会員制度により成り立っておりますので、毎日の職業活動そのものが奉仕に繋がらなければなりません。

ロータリーの言う職業奉仕には倫理・道徳が説かれるために、職業奉仕は難しいとか、職業奉仕をしていては会社が潰れてしまうというような間違った職業奉仕観念が潜在しているために、ついつい職業奉仕がなごりにされがちであります。

このため当地区の職業奉仕委員会では、この誤解を解くため各クラブの職業奉仕委員長を召集し、予てより「企業の社会的責任」はロータリーの「職業奉仕」の思想に密接な関わりがありと説く東京東RCの佐藤千壽パストガバナーをお招きして特別記念講演をお願い致しました。参加者一同多大な感銘を受けましたので先生にお願いしてその時の講演内容につき改めて原稿を起こして戴きました。御熟読下さい。

企業社会に突きつけられたオウムの刃	1
職場を自己練成の道場と考えよう	4
最大となることを望まず、最良となることを望む	7
目的の為に手段を選ばぬ罪業	13
先ず足もとの身近なところから	18
企業行動のあり方——東京商工会議所提言——	19
今こそ職業奉仕の実践を	23

## □ 企業社会に突きつけられたオウムの刃

職業奉仕を理論で観念的に語ることは誰でも出来ます。然しそれを百万遍唱えてみても、それが具体的行動になって現れない限り、何の意味もありません。「四つのテスト」を職場に貼り出しておいても、それが奉仕の免罪符になるわけではありません——殊に職業奉仕は職業人の実践倫理ですから、ロータリアン一人一人が、実際に事業遂行に当って何をしたかが問題なのです。話は易しいが、現実に行うとなったら決して易しくないのが職業奉仕です。そのせいでもありません。最近の国際ロータリーは、職業奉仕はクラブと会員双方の任務だ、などと逃げをうっています……職業奉仕を矮小化するものです。とにかく抽象的観念的な話は棚上して、身近な具体的問題から入ることにします——ここで、最初に今年起った衝撃的犯罪を事例として取上げ、そこから私共職業人に対する警告を読み取ってみましょう。

オウム真理教という擬似王国の諜報省大臣で首魁麻原の影武者になり、地下鉄サリン事件で実行班の現場指揮を取った井上嘉浩被告が、オウム入信直前に作ったという詩があります……新聞で御覧になった方もあるでしょう。一九八四年暮、中学三年生の時、自作の童話を、という出題に答えたもので、**〈願望〉**と題する手作り絵本の絵本だそうです。実際に私が見たわけではありませんので、新聞記事からそのまま孫引します。

黒鉛筆描きで、駅の階段から満員電車の人波が続く

〈朝夕のラッシュアワー

時につながれた中年達

夢を失い

ちっぽけな金にしがみつ

ぶらさがってるだけの大人達

汚水が川に流れ込み、空き缶が三つ流れている

〈工場の排水が

川を汚していくように

金が人の心をよごし

大衆どもをクレージーにさす……

高層ビル街に大きな太陽が昇り、ビルの窓を染める

時間においかけて

歩き回る一日がおわる

とすぐ、つぎの朝

日の出とともに

逃げ出せない、人の渦がやってくる

夜汽車の赤いテールライトが走り去っていく

救われないぜ

これがおれたちの明日ならば

逃げ出したいぜ

金と欲だけがある

このきたない人波の群れから

夜行列車にのって……

( '95.6.11 朝日新聞 )



親達の苦勞も知らないで何を勝手なことをほざく……と怒る方もありましょう——たしかにそう言いたくもありません。こんな青年しか育てられなかった教育にも問題がありましょう。然し、責任を他に求めるだけでなく、我々職業人もまた重大な反省を迫られるものがあるのではないでしょうか。

## □ 職場を自己練成の道場と考えよう

日経連の機関紙に「日経連タイムス」というのがあり、その一九七一年一月一日号に私は次の様な歯に衣着せぬ論評を寄せています。四半世紀も前のことですが、今読み返してみても一向筆を加える必要が無いばかりか、寧ろ重ねて声を大にして訴えたいところです。

私の会社の「経営の理念」と題する労使共通の指針においては、企業活動の重要な課題として、社員の間完成への道があげられている。すなわち、社員と会社との関係は、単に社員の物質的所得の増大を計るだけで終るものではなく、会社それ自体が、社員にとって、人間として普段に成長してゆく、一種の人生道場であればならないと理解されているのである。考えても見給え、われわれは一日の、最も

充実した貴重な昼間の時間、そのほとんどすべてを、会社という職場の中で費やしているのだ。この一日は、「地球よりも重い」と表現される、かけがえのない、この生命の一日であり、一たび去って永遠に返らぬ人生の一コマである。

そういう貴い時間をささげるわれわれの職場が、ただ単に、他社より一円でも多い金額を追い求める、労働の切り売り市場に過ぎないならば、会社とは何というつまらぬ陰鬱な所であろう。また、経営者というものが、まず、下請けや仕入れ先の労働力を買ったとき、次に自社の労働単価を少しでも安くすることに狂奔し、ひたすら利潤を追求することのみをもって、その使命とされるものであるなら、これまたなんと陰鬱な、いやらしい限りの存在であろう。経営者にとっても同じく貴重な人生——その人生の一日一日を、そんな仕事で費やすとしたら、不幸この上ないことである。

すくなくも、私はそんな人生に耐えられない。会社というものがそういう取引の場でしかなく、また、そこに徹することが経営だというなら、私は経営を放棄する。しかし、この世の営みのすべてが、人間のためにあるのであって、人間は決して手段ではない、ということを考えるなら、経営もまた人間を目的として行われなければなるまい。企業というものの、公益性はいうまでもないが、その企業に働く徒

業員も、貴重なる国家の構成員である。修身・齐家・治国・平天下、と昔の人は事の順序を教えたが、まず自分が経営する会社の従業員に幸福を考えることは、経営者として当然の責務であろう。

だが、幸福は物質の充足だけによって得られるものではなく、他人の犠牲の上に成立するものでもない。ところが、いささか僭越なものいいを顧みず、あえて直言するなら、今の日本の産業界の方々は、労使ともにこの点に対する認識が足りないのではなからうか。だから社内教育はどこでも盛んだが、それはただ会社の戦力としての人材養成でしかない。要するに事業遂行の手段なのである。それが不要だとはいわない。しかし、それで終わっていいのだろうか。それが真の意味の教育なのだろうか。

なるほど、こういうかも知れない。人間としての基本的な教育は、学校や家庭がやるべきことであり、さらに進んでは、自分自身が自己錬磨すべきであって、企業はそんなことに関与できないと。だが、会社というものを、単なる労働の切り売り市場としてではなく、人生の大半を過ごす「生活共同体」としてとらえる立場をとる限り、経営者は社員の間成長にまで責任を持たなければならない。無論、人間完成への道は、あくまで自力をもって、しかも生涯かけて追求すべきものであり、

その点においては、経営者も従業員も平等であつて、いずれが、いずれを教育するというようなものではない。だが、少くとも経営者には、自分の主宰する会社を、そういう自己錬成の道場として育てていく責務がある。

そういう基本的な教育姿勢を忘れて、単なる技能訓練にだけ狂奔したとて何になる。近ごろ、一流の銀行、会社でいわゆる「黒い霧」が続発しているのも、自分の会社さえ良ければ、という利己的な経営姿勢や、利潤追求一点張り、基本的な人間教育を忘れた社内体制に原因がある、といつてもいいのではなからうか。

会社は教育専門機関ではないから、教育だけが目的ではない。しかし、社内教育といえども、教育は社員それ自身のためにある、という基本姿勢を忘れてはならない。そして、社員が、仕事を通して、人間として、社会人として、精神的な成長を遂げること、これも重要な経営目的の一つであると信じている。

## □ 最大となることを望まず、最良となることを望む

私が戦後ささやかな寄合世帯の町工場に入って、その経営に携わる様になつた時、先ず独り固く誓つたことは——・△最大となることを望まず、最良となることを望む▽・でし

た。そしてこの誓はそのまま会社の社是となつて今日に至っています。

またこの社是の因<sup>きた</sup>つて来る「経営の理念」とは次の様な一文です。

会社は社員共同の生活の源泉であり、人間完成の道場である。されば先ず第一に会社の発展がそのまま社員の幸福——物心両面の成長に直結することを念願する。他方、会社存立の基盤たる現代社会は、日々不斷に会社が優れた有用の製品を世に供給することを期待している。我等は社員と社会のこの二つの立場における要求を調和充足しつつ、その過程を通じて人類の平和と進歩に寄与し、もつて公器としての使命を果たすことを経営の理念とする。

然らば、この理念のもとに結集し、会社発展の推進力となり、自己の人生を十二分に開花結実せしめるために要求される必要にして且つ十分なる条件は何か、いわく実力、いわく誠実、いわく闘魂、この三条、げにこの三つこそあらゆる生活の場における三種の神器である。この三条の満たされるところ欲してかなわざるはなく、そこにまたおのずから明るい職場、平和な職場、活気溢れる職場が現出するのである。而してこの職場を原動力として、日に新たに日々新たに、また日に新たな開拓者精神を押し進めるならば、あらゆる苦難を乗り越えて会社は成長発展を続けて

ゆくものと確信する。

願わくば我々は共にこの理念を身につけ、活力あらしめ、そして我等が職場に平和と友愛の橋をかけ、明朗にして健康なる生活の建設に邁進しようではないか。

いかがでしょうか、この理念を一言で表現すれば、 $\wedge$ 公的な善と私的な善の一致 $\vee$ ・ということになり、私はこの言葉を使って「私の願」と題する社員向のメッセージも書いています。ところがどうでしょう——後にロータリーの会員になって先ず手続要覧を開いてみましたら、 $\wedge$ 根本問題として、ロータリーは、自己のために利益を得ようとする欲望と、他人に奉仕しようとする義務感と、それに伴う衝動との間に常に起る争を和解させようとする人生の哲学である $\vee$ —決議23—34—という壮麗な宣言文が出ているではありませんか。これは正に、私が唱える $\wedge$ 公的な善と私的な善の一致 $\vee$ ・という理想と完全に共鳴するものです。更に続けてこう書いてあります—— $\wedge$ この哲学は奉仕即ち「超我の奉仕」の哲学であり……「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践倫理の原理に基づいている $\vee$ ……これまた、私の提唱する経営哲学を實踐することが即ち明るい職場、平和な職場、会社発展の原動力になる、という浪漫的志向と完全に一致します。私がロータリーにのめり込む様になったのは正にここからであります。

凡そ五十年も昔に掲げた経営の理念は今でも決して色褪せていません——いや今こそ  
なお声を大にして「最大となることを望まず 最良となることを望む」と多くの人々に呼  
びかけたいのです。一方、ロータリーの「決議23—34・セントルイス宣言」は、ロータリー  
は時代と共に変わる、とか何とか節操をかなぐり捨てて、なるべく棚上げしておこう、とい  
う風潮です。

私の会社のこの経営の理念は、現在でも『社員必携』の巻頭に掲げられ、新入社員教育  
は先ずこれから始まります。ところで、こういう理念を掲げて、五〇年前、最初にやった  
革新的な具体的行動は何か、と申しますと、社内的には、ブルーカラーとホワイトカラー  
の区別撤廃と全員月給制・出勤簿、タイムレコーダーの廃止・夏の五日間工場操業停止・  
全社員一斉休暇（今でこそ珍らしくありませんし、また不況操短ということはありません）、  
これを年間の暦に最初から組込むというのは奇想天外で、当初新聞種にもなりました）・  
社員互選による経営委員会……等であり、対外的には下請企業に対する全額現金払（二十  
五日締、翌月十五日支払で手形無し）・製品試験成績の虚偽その他対外的詐術厳禁・所謂  
「袖の下」厳禁……等でありました。また身体障害者雇用促進法など出来るずっと前でし  
たが、積極的に聾啞者の雇用にも取組んで、後年国連が提唱する「完全参加と平等」を、  
労使関係まで含めて先取りしているのであります。

またこういう対人的施策と共に、経営の基本姿勢として、あくまで本業一筋に徹し、本業の中で技術革新に取り組むと共に、本業に足掛りのあるところで多角化方策を取る、ということを守りました。従ってあのバブル経済のさ中いくら奨められても財テクなど見向きもしませんでしたから、バブル崩壊による被害とも無縁です。

私の会社では、新入社員教育を先ず経営の理念から始める、と申しましたが、それ以前に入社確定者には、私の『職業と人生——人生を二倍に生きる——』という著書を送り、入社までに熟読する様命じて各自に感想文を書かせます。この著書では、職業とは何か、ということ、つまり職業人の心構えを述べると共に企業の社会的存在意義と経営者の義務についても書いています。更に社会人として、これから長い人生を如何に美しく稔り多く生きるか、ということまで述べて、若者達の人生指針としているのであります。

口幅つたいことを申す様でまことに気恥ずかしいのですが、この本に書いてある様なことを、もっと早くから若者達が学んでいたら……あるいは私が経営の理念として述べた様な姿勢で、天下を動かす様な日本の大企業の方々々が職業奉仕の範を示してくれていたら……更にまたマスコミが企業性悪説を煽る様な醜聞ばかり書き立てず、私ごとき及びもつかぬすばらしい企業人のことを書いて青少年を励ましてくれたら……そしてまたロータリー



に青少年奉仕という部門があるのだから、これを将来の有力な会員候補などという小さな考えからではなく、ロータアクト、インターアクト等という枠も超越して、ロータリアン一人一人がその事業生活、社会生活に於て青少年の立派な模範となる様な行動をし、人生教師としての役を果たしてくれたら：——冒頭に挙げた中学生の様な詩は生まれなかつたでしょう。物質的には満ち足りても、希望の無い暗い時代なのです。

ここでまた今から三十年以上も前のことを思い出しました。日経連労務管理調査団の一員としてアメリカを訪れ、ハーバード大学で経営学の講話を聞いた時のことです。講師のDr. Foxが、今アメリカでは高校生の25%が途中脱落し、これが不良化して犯罪の温床になっている——これはアメリカの最大の悩みだと言いました。そこで何故そんなことになるのか、と質問したところ、幾つか理由を挙げた中で、最も憂慮すべき問題として——高エネルギーという明るい反面に、急速な勢いでオートメーション化が進み、毎日四万人もの職場が失われて行くという暗黒面がある。そこで最も失業率の高いのが若年層だが、一方技術革新も想像を絶する程早く、昔は熟練工として尊敬された中高年者も、これについて行けない者はどんどん弾き出される。こういう大人の世界を見ている子供達は、誰も将来に希望を持ってないのだ。その上、こういう劇しい技術革新に対応するため、学校の授

業も益々高度化専門化して、とてもこれについて行けない子供達も多くなっている。これでは青少年が学校を脱落し、麻薬に溺れ、アウト・ロウに転落してゆくのも防ぎ様がない、と言うのです。

いかがでしょう——アメリカを目標にして、追付き超越せと走ってきた日本が、今全く同じ問題に直面しているではありませんか。

## □ 目的の為に手段を選ばぬ罪業

人間にとって何ものにも代え難いのは自己実現の欲求であります。然し現実の企業社会は、社員のそういう切実な願望に<sup>こた</sup>応えているでしょうか。どんな逸材であろうと、官庁でも企業でも、その組織に入れば巨大な利権機構の歯車の一つでしかありません。そして歯車は使い古して磨耗すれば屑金として払下げです。オウムの麻原はこの盲点を見事に突きました——この教団が他の多くの新興宗教と全く違う異様な組織で世の注目を集めたのは、一流大学の理工系の秀才をずらりと幹部に連ねている所でしょう。麻原は、教団に來れば設備も整っている、研究費もいくらでも出す、自由な研究が出来る、然も別格の高給で、この疑似王国の大臣<sup>・</sup>という地位も与えられる、と言葉巧みに求人活動をしたわけです。

この巧言に乗せられて、戦後教育の偏差値秀才達は魂を悪魔に売渡してしまいました。

営団地下鉄千代田線でサリンを撒いた直接の下手人は、林郁夫という医師ですが、実行班の最年長者で四八歳——慶応大学医学部を卒業しアメリカにも留学しています。それが逮捕取調べ中、実行時の心境を尋ねられてこう告白しています——

「地下鉄に乗り込み、持っていた袋を床に置いてふとまわりを見渡すと、たくさん  
の通勤客の姿が目飛び込んできた」……「私は医者だ。人の命を救うために仕事  
をしてきたはずだ。それなのに、いまこの袋を傘の先で破ってサリン液を出せば、  
何人もが一度に死んでしまうと思った。良心の呵責にさいなまれ、躊躇して何度も  
やめようと思ったが、教団の命令には逆らえなかった」(95.5.20・朝日新聞)。

病院勤務時代には腕のいい心臓外科医として評判の高かった医師——それさえあるに、  
年も四八という分別盛りではないか……それが事もあろうに、組織の命令なら殺人もする  
という……それも敵対する特定の相手を殺すのではない、何の利害関係もない善良な市民  
に対する無差別殺人なのだ——

麻原教祖は、「真理のためなら盗んでもお布施を……」「財を奪い取ってでも、真理の

「実践に使うなら最高の功德になる」と説き、あげくのはては、殺人正当化の説法までする様になりました————平成元年九月、東京南青山の教団東京総本部で行われた説法の一齣……「Aさんという人がいて、天界へ生まれ変わるはずなのに魔が生じ、このままでは悪業を積んで地獄に落ちそうになっている」・「ここに修行を積んだ成就者が居て、生かしておくとは地獄へ落ちると考え、Aさんを殺した。人間界の人から見たら殺人だ」・「しかし、Aさんは天界へ生まれ変わり、救世主が永遠の生命を与えた……これは立派な善行だ。天界に送ってあげたのだから功德を積んだことになる。」(『S・P・産経新聞』)。

ごく稀に出る精神異常者の言葉として簡単に割切ることが出来るでしょうか。たしかに彼は宗教界の鬼子です。然しこういう鬼子を生んだ母胎はやはり疑も無く現代社会ではありませんか。そう考えて冷静な眼で我等を取巻く環境を眺めてみましょう。

戦後しばらくの間、「黒い霧」という言葉が屢々新聞に出ましたが、その後も今に至る迄、政・官・財の鉄のトライアングルを巡る汚職事件は後を絶ちません。ここ数年の間にも、リクルート・イトマン・共和製糖・佐川急便……と内閣の屋台骨を揺るがす大事件が次々発覚しています。共和汚職で逮捕された阿部文男被告は、北海道・沖繩開発庁長官、自民党宮沢派事務総長という隠れも無い政界の要人ですが、「泥棒してでもお金が欲しかっ

た」と告白しています（92.5.12～13・朝日新聞）。

目的の為に手段を選ばず、という姿勢が公然とまかり通る様になったのが、八〇年代高度成長期の日本でした。経済・一流・政治・三流などと政治家を批判していた財界だって一皮剥いてみれば何のことはない・財界に君臨する大企業の行動にしても、儲ける為には何をしてもいい、目的の為に手段を選ばずではなかったでしょうか——それが空前の泡沫<sup>バブル</sup>経済を演出したのです。一昔前には財界の師表と仰がれる様な立派な経営者を擁していた住友にしても、その銀行の頭取は、「向う傷を恐れるな」と行員を督励して、一時はその収益に於て金融界の頂点に登りつめました。

営業活動ばかりではありません、雇用政策に於ても無責任極まる、と称してもいいでしょう。求人自粛の申合せをしておきながら、裏では抜駆けの青田刈——そうして必要以上の人を掻集め、それから一年も経たぬうちに不況深刻と見るや採用延期・自宅待機……それでも間に合わぬとなって、組織再編成・リストラクチャリングとか、もっともらしい錦の御旗を掲げて中高年層・管理職を狙撃……人材という用語がありますが、人間も材料の一つに過ぎぬというのでしょうか。これは全く在庫整理の考えと同じで、今大企業は何処でも棚卸見切販売の最中です。労働力の流動化、と建前は全く申分ありませんが、経営首

脳の眼から見れば労働力も商品なのです。ここでもう一度、先程お話したD.H. FOMの指摘を思い返して下さい。こんな日本の指導者階級を誰が信用するでしょうか。冒頭に読んだ少年の詩は、こういう理不尽な現実社会を見通しているのです。

誤解の無い様申し添えますが、こんなことを言ったからとて、私は決してオウム教団の罪を軽く見る者ではありません。何か一言揚足を取らないと気がすまぬマスコミやまやかの評論家は、この極悪犯罪を社会の責任にすりかえるのか、などと言いたがりますが、私はただ、犯罪は犯罪として、法に照して断罪すると共に、我々にも反省すべき所がないかどうか……と、いうことを言いたいのです。

勿論、今の社会に問題があるからとて、若者達が全部悪くなるわけではありません。現に隠れた所で黙々と奉仕活動をしている真面目な青年が沢山居ります。

また一方、私達がどれ程姿勢を正して立派な国を作ったとて、それで犯罪が一つも無くなるとも思われません。然し、私達が姿勢を正し、より良い社会を作ることによって、十の犯罪が七になり六になる……そこに意味があるのではないでしょうか。

## □先ず足もとの身近なところから

人間は材料ではない——手段ではない、人間の営みのすべては人間の為にある。金は目的ではない——人を生かす為の手段である……幾百回繰返し叫んで来たか分らぬ私の持論です。

先程申し上げた様に、私の会社の社員教育で経営の理念を説くに当り、具体的行動目標として、私が示す要項が三つあります。入社式の終った直後に、新入社員全員と人事関係の幹部を前にして私自身、懇々と説明するのです——

第一は、「社会人として」——紙屑、煙草の吸殻を道に捨てるな。遊山に行っても空缶、空箱の類は必ず所定の屑籠に入れよ。電車・バスの中で如何に疲れていても、老人と障害者に席を譲れ。

第二は、「自分自身の為」——プロになれ……独り遊びを覚えよ……

第三は、「我社の社員として」——目的の為に手段を選ばずというのは私が最も憎むところ……上役の命令であっても、自分の良心に照して間違っている

と思つたら従う必要無い。それで上役と論争になつたら私の所へ直訴して来い。

第一と第二についてはなお詳しく説明する必要があるのですが、本講の目的から逸れ<sup>キ</sup>ますので省略します。要するに脚下照顧です。すべては一番手近な所から始まります。第三は、これこそ職業奉仕の出発点です。出発点を間違うから職業奉仕がおかしくなつてしまふのです。

### □ 企業行動のあり方 —— 東京商工会議所提言 ——

リクルート事件で世情騒然たるさ中、東京商工会議所は『企業行動のあり方について』という提言を出しました。これは一九八九年八月、軽井沢の会議所幹部会議に諮って決定し、更にその後の常議員会の決議を経て、全会員企業に配布されたものですが、この原案策定には私も参加して居りまして、その際、一九八九年シンガポールの規定審議会で採択されたロータリーの『職業宣言』を、最も重要な参考文献として草案を練つたものです。自画自賛ではありませんが、ロータリーの思想をこれ程強く取り入れた財界の文書は未だ



曾て無いでしょう。

かなりの長文ですが、その中で特に職業奉仕に密接な関りのある部分を引用します。  
第四章へ企業経営者等の責任▽です。

（経営者に望まれる資質）——企業行動を実際に行うのは、企業の構成員である経営者と社員である。従って、これらの人々が企業行動のあるべき姿に強い自覚と責任をもってこれを推進していかなければ、社内にどんな立派な倫理規定等を設けたところで実効は期しがたい。要するに、企業の責任とは、究極的には企業に係わる個々人の責任がその基礎となっているのである。

なかでも経営者は、企業行動について、方針や目標を決定し、それを遂行する責任を負っており、その影響力は極めて大きい。それ故、一企業の行動は経営者個人の倫理観や価値観等に左右される面が非常に強く、企業行動のあり方は、経営者の資質と能力にかかっていると云っても過言ではない。

その意味からも、企業経営者には、利潤を最大にするためのいわゆる経営力ほもとより、これに加えて、社会性、公共性、高邁な人間性が求められている。社員よりも一段と高い倫理観、厳しい自己規律が要求されるのは当然である。

すなわち、人間として、勤勉、奉仕の精神を体现するとともに、対外的には特に正直かつ公正であることが強く要求されていることを銘記すべきである。

(社員の責務と企業体質の改革)——企業の個々の具体的行動に直接携わるのは、当該業務を担当する社員であり、この点、望ましい企業行動の実践は社員個人の双肩にかかっている。

このため、社員一人一人が企業の社会的責任を深く認識し、自ら良心に則って行動することが強く望まれる。

しかしながら、わが国企業の現状は、企業の行動に社員個人の倫理観や正義感が反映出来る体制には必ずしもなっていない。むしろ、多少アンフェアと思われる行為であっても、利益をあげれば、「会社のために」という言葉が免罪符とされ、却って社内的評価を受けるといふ傾向すら見受けられる。我々は、こうした企業体質を早急に是正していかなければならない。このため、各企業においては、まず経営者が高い倫理観を持ち、社員の人権を尊重することはもとより、社員教育を徹底し、アンフェアな行爲を行った者については、仮に相当の利益を獲得したとしても、厳罰に処するぐらゐの厳しい姿勢で臨むことが必要である。

綺麗事過ぎる、そんな理想論で商売が出来るか……そんな陰口も随分聞きました。然しこれは王道です。王道を行くのが一番楽な処世であり、またそれが取りも直さず・八最大となることを望まず、最良となることを望むV・者の道ではありませんか。

ところで、なんと皮肉なことに、この提言が出されて四年後の九三年の春、金丸副総理を辞任にまで追込んだ大手ゼネコンの闇献金・談合入札という問題が浮上しました。この事件の中心的役割を果たしたのが鹿島建設で、その鹿島の代表取締役会長石川六郎氏が東商・日商の会頭だった為、話が大変怪しくなってしまうました。それから連日会頭の進退問題がマスコミで取上げられました。一民間人の進退問題がこれ程長期に新聞雑誌を賑わした例は一寸見当りません。会議所当局は慌てふためいて執拗に弁明相務め、挙句の果は、何人かの議員に密かに依頼し、発言内容の草稿まで用意して、東商・日商の常議員会で会頭擁護演説をやらせたのです。

会頭が辞任しないと言張る論拠は、要するに公職と私企業の代表は別の次元の問題だということ。自分は会議所の議員、会員に対して何も悪いことをしたわけではないから、単なる会社の不祥事で辞める謂れは無い……会議所にも、又会頭個人としても、それぞれお家の事情があり、面子にもかかわることですから、今更それを深追いすることは慎みま

しょう。然し同じ会頭のもとで出された先の「提言」との矛盾は言訳がききません。

## □今こそ職業奉仕の実践を

職業奉仕は口頭禅では駄目です——如何に行動するかが問題なのです。そして行動するのは一人一人の個人です。

市民の皆様方を恐怖のどん底に突き落した凶悪犯罪集団オウム真理教を引合に出して話を進めましたが、企業を預る我々の社会的責務について御理解頂けたと存じます。社会の安寧平和に職業人の行動がどれ程大きな影響力を持っているか、思半ばに過ぎるものがあるでしょう——混乱と不安の時代に希望の光を投ずる者は、我々職業人を措いて外にはありません。「今こそ職業奉仕」——と自信を持って立上ろうではありませんか。

残念ながらロータリーに於て、職業奉仕は年毎に形骸化して行きますが、職業奉仕の形骸化はロータリーの空洞化です。職業奉仕がある限りロータリーの社会的存在意義は失われません。然し職業奉仕が無くなればロータリーのロータリーたる所以も失われます。如何に会員数が膨脹しようと、如何に財団の資金が巨大化しようと、その時はもう国際赤十

字かユネスコの下部機構でしかなくります。

組織の宿命として、ロータリーも他の団体同様、常に会員増強・拡大を叫び続けています。然し何の為の増強・拡大か、その理念・哲学が示されていないのです。

私は必ずしも増強を否定する者ではありません——ただそれは良き職業人の増強ということで初めて意味を持つてくるのです。

会員増強は、数で今年何パーセント増やせなどと督励すべきものではありません。数字にこだわればロータリーは益々空洞化するだけです。

私は昔から一貫してこう主張し続けています————会員増強の王道は、今の会員一人一人が立派な職業人として社会の模範になることだ。そういう実績を行動をもって世に示せば、ロータリアンは社会から尊敬される様になる……尊敬される様になれば、人は自分もその仲間に入りたい、と願う様になる。

---

一九九五年八月一日

〔註〕その後、十月十二日、東京地裁で行われた拘留理由開示の席上、井上被告は自ら希望して、拘留中に書き上げた陳述書を発表しました。彼は自分達のやったことが間違っていた、と反省した上で、更にこう言っています——

「しかし、私たち多くの若者が、私たちの知らないところで情報統制され、煩悩的情報によって、自己の正常な思考が生活のあらゆる側面で悩殺され、蹂りんされていくという不透明さや底無しの不安をこの現代社会に感じ、自己の覚醒と人々の救済を目指して、尊師のもとに集まって、オウム真理教が存在したことには、それなりの意味があったはずである」

「これからの私自身の裁判では、何故オウム真理教がこのように至ったのかを戦後五十年を経て、経済的勝利とともに物質主義がまん延し、それと引き換えに精神のよりどころを見失った日本の現状を踏まえ、明らかにしなければならぬと思っています。それこそが真の解決であり、オウムの犯罪に係わった私のできる唯一の償いであると思っています」

拙劣な文章ですが、その言わんとする所には、やはり我々職業人に対しても反省を迫るものがあるのではないでしょうか。

---

## 企業の社会的責任

---

1996年1月1日 初版発行(1,100部)

著者 佐藤 千壽

---

発行所 国際ロータリー第2590地区 職業奉仕委員会  
委員長 内田 全俊  
〒222 横浜市港北区岸根6-1  
メモワールプラザ・ソシア21  
電話 045-475-2590

編集・印刷 光和サービス株式会社

---